〔研究論文〕

ドロシー・スミスの社会学における institutional discourse について

上谷　香陽

〔Article〕

On Institutional Discourse in Dorothy Smith's Institutional Ethnography

Kayo　UETANI

Abstract

The purpose of this paper is to examine the concept of ' institutional discourse' in Dorothy Smith's Institutional Ethnography. According to Smith, the institutional discourse has a capacity to subsume or displace people's experientially based knowledge. What people come to know that originates in their bodily being and action is translated as instances or expressions of the discourse's frames, concepts, and categories. Smith regards institutional discourse as trans-local social relations that coordinate the practices of definite individual's talking, writing, reading, watching and so forth, in particular local places at particular times. By entering into such social relations, people come to know 'the social' from pointless view and separate it from their own everyday life world. Based on Smith's discussion, this paper examines the implication of her concept institutional discourse and explicates her demonstration of her own experience of a 'text-reader conversation' in reading a passage from sociological theory. In so doing this paper seeks to develop a sociological way of thinking which explores the social organization of knowledge without being captured by institutional discourse.

１．はじめに

社会学の概念は、個人の見たり聞いたり経験したりすることを「社会的なこと」として理解するためのものの見方を示す、思考の言葉の一つである。私たちはこの思考の言葉を使って、自分の身に起こっていることが自分だけの問題で完結しないこと、自分の身に起こっていることが他者の身に起こっていることと関係していること、自分と他者の間には共通の利害関心が見い出せること、自分の行っていることや考えていることを一定のやり方で方向づける何らかの仕組があることなど、自分の日々の生活について日常の言葉を使っていては知り得なかった新たな側面を「発見」できる可能性がある。

他方、本稿で論じたいのは、社会学の言葉を含め、ものを考えるための言葉が日々の生活で使う言葉と切り離されてしまうことによって、思考の言葉を使うことが自分の身に起こっていることの理解を深めることにはならない可能性があること、あるいは、「社会的なこと」を自分とは切り離し抽象的な脈絡のまま「他人事」として捉える思考法を導いてしまう可能性があるということである。

以下本稿では柳父章の翻訳日本語論によって提起された問題を手がかりに、カナダの社会学者ド

ロシー・スミスの議論に依拠しながら、この問題を知識の社会的組織化をめぐる社会学的探究の論点として検討していきたい。

2．思考の言葉と日常の言葉の断絶をめぐる論点

柳父章は『翻訳語成立事情』(柳父 1982)で、日本語において、ものを考えるための言葉が、日常の言葉と切り離され、日常生活とは別のいわば「勉強部屋」の言葉になっていると指摘する。ここで日常の言葉と切り離されている思考の言葉とは、例えば「社会」「個人」「近代」など、中学・高校の教科書や、新聞紙面などにも出てくるいわゆる学問・思想の基本用語のことである(1)。柳父の議論によれば、日本語において学問・思想の基本用語が人々の日常の言葉と切り離されていることは、それら学問・思想の言葉が翻訳語であるということと関わっている。『翻訳語成立事情』において考察されるのは、ものを考えるための言葉が日常の言葉と切り離されているという日本語使用の特徴と、明治以降の日本の急速な近代社会化の過程との関連である。

「社会」「個人」「近代」といった言葉は、幕末から明治時代にかけて、翻訳のために造られた新造語、あるいは実質的に新造語に等しい言葉である。この頃翻訳された言葉には、このように、漢字二字の名詞形をとるものが多いという。これは、西欧近代の学問・思想の言語構造が名詞形の言葉を中心に組み立てられているためだが、それに加え、そもそも中国の学問・思想もまた名詞中心にできていたことも関わっていると、柳父は指摘する(柳父 1982:118-9)。かつて中国の漢字の文化を熱心に受け入れてきたからこそ、同様のやり方で、近代以降、西欧語の学問・思想を比較的容易に受け入れることができたのだと指摘されるのである。

他方、『翻訳語成立事情』においては、日本語の「思考の言葉」のこのような成立事情に伴う、いくつかの「歪み」について考察される。それは、一言でいえば、「翻訳語に特有の効果によって、言葉の意味の分かりにくさや矛盾がかくされていて、人々に気づかれにくい(柳父 1982:iii)」ということである。ここで指摘される、ものを考えるための言葉の「分かりにくさ」とは、単に「そもそも学問・思想の言葉は抽象的であり、それゆえ意味がわかりにくくなる」ということにとどまらない。たしかに、考えるための言葉は、個別具体的な事象を抽象化する作用がある。ただしそれらの言葉を翻訳語として受け入れてきた日本語の場合、具体的な日常の言葉と抽象的な学問・思想の言葉の関係が、逆転している可能性があると指摘される。まず具体的な日常的意味を持つ言葉が先にあって、しかるのちに一定のものの見方で抽象化し意味を限定して使う、という順番になっていない。限定した意味を、翻訳語として受け止め、いわば完成された意味として受け取ることの多い日本語では、この順序はとかく逆転して理解されがちだ(柳父 1982:78)と指摘されるのである。

柳父はこれを「翻訳的演繹論理の思考」と呼ぶ。このような思考法は、日々の生活における問いかけをきっかけに動き始めた思考を、学問・思想の基本概念の言葉にたどり着いたところで停止させてしまう。ものを考えるための抽象的な言葉に含まれたものの見方を、自らの日々の生活で見たり聞いたり経験する現実を語る日常の言葉に基づいて改めて吟味し、点検し、再考してみる、という逆向きの思考は妨げられてきたのである。私たちはある意味で「思考の言葉」に習熟すればするほど、自らの日々の生活の個別具体的な事象に立ち戻ることもなく、「他人事」として「ものを考える」やり方を身につけていく可能性があるのである。これは単に知識が不足しているとか、語彙が少ないとかということだけの問題ではないように思われる。

柳父の翻訳日本語論が提起する「思考の言葉と日常の言葉の断絶」をめぐる論点は、社会学的な文

脈で捉え直すことが可能であると考える。本稿では、以下、カナダの社会学者ドロシー・スミスの議論を手がかりに、抽象的な脈絡のまま「他人事」として「ものを考える」思考法と、そのような思考法を生み出す「学問・思想の基本概念」の使用のし方の問題について、さらなる考察を進めたい。

抽象的・一般的・普遍的・客観的とみなされてきた思考の言葉（専門的知識）と具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常の言葉（日常的知識）との関係を問い直すことは、1970 年代以降の社会学における一つの主要な論点になってきた。1960 年代末以降の北米における女性解放運動に示唆を受け、1970 年代から「女性のための社会学（sociology for women）」を展開し、「インスティテューショナル・エスノグラフィー（institutional ethnography）」という独自のアプローチを発展させてきたドロシー・スミスもまた、まさにこの論点を自らの社会学的探究の中心に据えてきた。スミスの社会学の問題意識は、「女性の立ち位置（women's standpoint）」、すなわち近代社会において「周辺」化された人々の立ち位置から、「支配的な」知識の成り立ちを解明することにある。その上で、日々の生活において自分や他者の身に起こっていることを知るやり方を組織化する、概念使用実践の力（conceputual practices of power）に着目してきた。彼女もまた、思考の言葉と日常の言葉の断絶に注目し、そのような断絶を生み出す「支配的な」知識の社会的組織化のあり方を社会学的に解明してきたのである。

3．institutional な言説としての思考の言葉

21 世紀の北米の社会学において、スミスの社会学は、institutional ethnography として広く認知されている。スミスの言う institutions とは、教育や健康管理や医療や行政や経営や法や知識などの、弁別的な機能をめぐって組織化される社会諸関係―人々の日々の生活を支配する諸関係（ruling relations）―に埋め込まれた、複合体のことである。institutions という用語によって、スミスは、一つ以上の社会関係の様式の交差点や連係を同定する。例えば、国の機関（state agency）は専門的形式の諸組織と結びつけられており、両者は言説の諸関係によって互いに深く貫かれている（Smith 2005:225）。instititouns とは、第一義的には北米社会における人々の日常生活に深く関与している、組織や機関や施設のことである。さらに、それら institutions は相互依存的に関連する複合体をなしており、単に実体的な組織としてのみならず、「言説（discourse）」を媒介に複数の人々の行為が連鎖し配置される諸関係の交差点や連係として捉えられているのである。

フーコーに依拠しながら、スミスは「言説」を「知識の対象を弁別的なやり方で定式化し認識する、慣習的に規制された言語を使用する実践活動」と定義する。スミスの議論において、言説は、特定の時間に特定の局所的な場所で、話したり、書いたり、読んだり、視聴したりなどしている一定の人々の実践活動を連係する（coordinate）脱局所的諸関係である。人々は言説の中に参加し、かれらの参加が言説を再生産する。言説は、人々が言えること書けることを制限する。そして、人々が何を言い何を書くかが、言説を再生産し修正するのである。言説は多様なやり方で規制されているが、作動中の言説のどの瞬間も、言説を再生産し作り変えていくのである（Smith 2005:224）。

その上で、スミスは、institutions において作動する言説（institutional discourse）の以下のような特徴に着目する。すなわち institutional な言説は、人々が行うことのうち、その言説の内部で記述可能な側面を選択し、人々の経験―自分の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていること―を institutions の産出に不可欠なものとして包摂していく（Smith 2005:225）のである。ここで重要な役割を果たすのが、組織や機関や施設が産出する、「実際に起こったこと」の公的な記

述・記録・報告としての「テクスト」である。

人々が institutions と接触する際に必ず行われるのが、日常生活における個別具体的な経験を、「テクスト」―印刷されたものであれ、電子的なものであれ、複製可能な物質として組織間を流通する 公的な文書―にまとめ直す作業である。人々が行うことのうち institutional な言説の内部で記述可能な側面を取捨選択していく「テクスト」作成のワーク(2)には、人々の経験に基づいた記述を institutional な言説の枠組み、概念、カテゴリーの例や表現として包摂する手続きが含まれている。特定の視点から自分の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることとしての「実際に起こったこと」は、「テクスト」作成の過程で、主体や行為主体としての人々が消えた特定の視点を持たない表象に転換される。insutitutional な言説に習熟することとは、自他の身に起こったことを特定の視点を持たないやり方で書き、話し、聞き、理解する方法を身につけることでもある。そのようなやり方を自明視することによって、経験に基づいた知識とのやりとりが容易に失われてしまうことになるとスミスは指摘するのである(Smith 2005:225)。

スミスが institutional な言説のこのような作用に注目するのは、人々の日々の生活が、公的組織や組織的実践活動の官僚的、専門的、その他の諸形式に深く依存していると捉えているからである。作成された「テクスト」は、異なる場所で、異なる時間に、異なる人々が読む(見る、聞く)ために繰り返し現れうるという特徴を持つ。「テクスト」がそれを使用する一つの場所から別の場所に移動しても認識可能に同一であるということは、行政・経営・専門組織がその弁別的な機能を果たすために不可欠である。諸組織や諸機関や諸施設において異なる時間、異なる空間でなされる人々の多様なワークは、「テクスト」に媒介された言説によって相互関連的に連係される。そのことを通して、人々の個別具体的な毎日毎夜の生活を外側から規定する何らかの決定が下されていくのである(3)。institutions は、実際に起こっていること、経験、進行中のこと、出来事を、公的組織(機関、施設)の法や目的によって定義し定義される客観化する記録システムへ置き換えるワークを行う。このワークの考察なしには、日常生活世界を(専門知識人の言説における)カテゴリーを超えて見出すことができなくなる、とスミスは主張するのである。

柳父の言う「学問・思想の基本概念」は、スミスの言う institutional な言説における諸概念の一部と捉えることができる。社会学が「社会」について書いたり読んだりする作業もまた、institutional な言説に埋め込まれている。20 世紀後半以降、社会学においては、そのこと自体が社会学的探究の一つの論点として捉えられるようになった。前述したように、抽象的・一般的・普遍的・客観的とみなされてきた思考の言葉(専門的知識)と具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常の言葉(日常的知識)との関係を再考することが、1970 年代以降の社会学における一つの主要な問いになってきたのである。

柳父が日本語の「思考の言葉」の成立事情に伴う「歪み」として指摘した、「翻訳的演繹論理の思考」は、ここでスミスが指摘する institutional な言説に特徴的な思考法でもある。このような思考法によって、日々の生活における問いかけをきっかけに動き始めた思考が、学問・思想の基本概念の言葉にたどり着いたところで停止させられてしまうこと。ものを考えるための抽象的な言葉に含まれたものの見方を、自らの日々の生活で見たり聞いたり経験する現実を語る日常の言葉に基づいて改めて吟味し、点検し、再考してみる、という逆向きの思考が妨げられてしまうこと。「思考の言葉」に習熟すればするほど、自らの日々の生活の個別具体的な事象に立ち戻ることもなく、「他人事」として「ものを考える」やり方を身につけていく可能性があるということ。これらの論点は、知識の社会的組織化の問題として社会学的に探究していくことが可能である。

4．institutional な言説における「共通に知られた世界」の作られ方

4－1. 行為の主体としての「名詞化された」言葉

支配する諸関係に埋め込まれた institutional な複合体は、それに関わる人々が日々行なっているルーティン・ワークをとおして作動する。教育や健康管理や医療や行政や経営や法や知識などの弁別的な機能をめぐって組織化される社会諸関係の作動にとって、institutional な言説は中心的である。スミスによれば、この言説の特徴は、言葉と経験の関係の親密さが欠けていることにある。「犬」や「テーブル」など、事物につけられた日常の言葉は、具体的な経験の中にその言葉が指示する事物を見出すことができる。しかし、insitutional な言説においては、この言葉と経験の関係のなじみ深さは消滅するのである。スミスは、かつて自分が博士論文に取り組んでいた時、フィールド・ワークを行っていた州の精神病院のカフェテリアに座って、「でも社会構造はどこにあるのだろう？どうやって私はそれを見つけるのだろう？」と自問していたことを思い出すという。カフェテリアでのその瞬間を思い出すのは、それが何年も彼女を悩ませる問いになったからである（Smith 2005:54）。

この問いは、単に社会学の専門的知識が足りない、「社会構造」という概念の理解が足りないということに還元できない広がりを持っていた。後にスミスは、言葉と経験の関係の親密さを欠くような知識の社会的組織化の特徴を、institutions の作動にとって必要不可欠な構成要素と捉え直すようになる。institutions におけるルーティン・ワークは、まず、特定の視点から自分の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることとしての実際に起こっていること、経験、進行中のこと、出来事を、公的組織・機関・施設の法や目的によって定義し定義される客観化する記録システム―「テクスト」―へ置き換えることから始まる。そのような「共通に知られた客観化された世界」として構築され直して初めて、日々の生活で人々の身に起こったことは、institutonal な過程で取り扱い可能な現実（institutional reality）となるのである。

前述したようにスミスは、言説（discourse）を、人々が具体的な時間や空間で具体的な身体をもって行う実践活動と捉えている。概念や、知識や、理論的言説は、単に人々の頭の中にあるのではなく、人々の活動の世界と同じ世界へ連れて行くことが可能であり、したがって、実際の実践活動として社会学的な解明にさらすことができるのである。社会学的言説における社会的現実の組織化のあり方も、institutonal な言説がそれに参加する人々の「知ること」を組織化するやり方の解明の一環として、それ自体、社会学的に探究することが可能である。社会学の訓練を受け、社会学的言説に習熟していくということは、多かれ少なかれ、言葉と経験の関係の親密さが欠けた institutional な言説の概念やものの見方を使って自他の身に起こったことを記述することに習熟することでもある。後述するように、社会学的言説のこの特徴は、人々の経験に依拠した社会学的知識を産出しようという試みにおいてさえ、気づかぬうちに入り込んでいる可能性があるのである。

社会学の「共通に知られた世界」を達成する方法は、社会学の言説の組織化において構成的力を持つ様々な社会学理論において生み出されてきた慣習である。この慣習は、特定の社会関係の場所に位置づけられている社会学的言説の読み手や書き手の関心や経験を、客観化された形式に翻訳するための一般的手続きを提供する。そのような形式に翻訳されることで初めて、「人々の経験」は、社会学的言説の「テクスト的共通の世界」における存在としてお墨付きを与えらえるのである。この慣習は、「社会的なもの（the social）」を人々の生活の個別性を超えたものとして書く（そして読む）方法を提供してきた。そのような方法を通して、読む主体の間の関係や、読む主体とテクストが話したり

(話さなかったりする)他者との関係が組織化されていくのである(Smith 1999:51-52)。

社会学的現実を特定の個人に外在して存在するものとして言説的に構築することは、客観化する装置として作動する専門化された概念カテゴリーの形式を通して発展されてきたとスミスは指摘する。その特徴は、人々の活動やトークや関係や考えを、行為しトークし関係し考える主体抜きに表象することである。代表的な方法は、何らのやり方で行為の動詞に由来する言葉を名詞の形式に転換する、名詞化(nominalization)である。例えば、意味(meaning)、秩序(order)、権力(power)、自殺(suicide)、家庭内暴力(family violence)など、社会学の用語には、ある主体の行為を表現する動詞が名詞の形式に転換された言葉が多い。関連して、態度(attitude)、動機(motivation)、信念(belief)、疎外(alienation)、関心(interests)など、個人の主観的状態をそれ自体実体として構築する名詞も多用される。それらの用語は社会学的文章の中で、主語として機能するようになる。ひとたび名詞化された社会現象が構築されると、人々にではなくそれらに行為の作用(agency)が帰属可能になる。名詞化された概念自体が、社会学的文章の中で行為の代理人(agent)として機能するようになるのである(Smith 1999:59-60, Smith 2005:55-56)。

名詞化された言葉は、行為の主体(subjects/agents)の存在を抑圧する。物事は起こった、しかしそれらを行なった人々の存在はないのである。名詞化された言葉の多くは、元々は行為の動詞に起源を持つ。誰かが、何かが、何かを、何かとされることを行なったのだ。この名詞を「荷ほどきする(unpacking)」する、すなわち名詞の形式の言葉をアクティブな動詞の形式に分解してみることもできる(Smith 2005:111-2)。例えば「制度的な配置の創造と実施」(4)のような言い方においては、創造する、実施するという二つの動詞に分解できる。創造する人、実施する人が存在するのだ。この場合、ある個人 a が創造し、別の個人 b が実施するかもしれない。あるいは、個人 a が実施し、別の個人 c が創造するかもしれない。ここには、institutional な言説のある種の奇妙な特徴が見出しうる。名詞化された言葉は、起こったことの表象という点である種の曖昧さを有していると言えるのである。

行為の主体としての人々の欠如は、単に、関わっている人が誰か同定できないという問題のみならず、荷ほどきされた名詞の様々な要素を横断した行為主体(agents)の継続性の問題も有している。ひとたび荷ほどきされると、行為主体は同じ人物である必要がないとわかるのだ(Smith 2005:112)。それぞれの行為に結びついているのが単一の行為者なのか、複数の行為者なのかは、「テクスト」の内部からは確かめることができない。読み手は、所与の institutional なテクストから、それが指示しているものへ行くことができない。厳密な意味では、テクストは、記述的には機能していない。にもかかわらず、「テクスト」は「実際に起こった」ことを記述しているように見え、そうしていると見なされ、institutional な過程で適切に機能しているのである。スミスはここに、institutional な言説の有するある種の「曖昧さ」を埋める、(institutional な言説に習熟した)読み手による何らかの言語使用実践活動が介在していると指摘するのである。

4－2. 社会学的言説における構成的慣習の力

スミスは「社会学理論：フェミニストのテクストに家父長制を書き入れる方法(Sociological Theory : Methods of Writing Patriarchy into Feminist Texts)」(Smith 1999:45-69)において、上記のような社会学的言説の構成的慣習が、フェミニスト社会学者の企てに突きつける困難について論じている。社会学の解釈的ヘゲモニーによる女性の局所的経験の破棄を批判し、自分が話してきた女性たちの声や解釈を保存する解釈法を追究するフェミニスト社会学においてさえ、社会学的言説の構成

的慣習の罠に捕まっていると気がつかされることがしばしばあると言うのである。スミスは、このジレンマを示す例として、アン・オークレーの仕事を取り上げる(Smith 1999:64-65, 2014:237)。

オークレーは、教科書が規定するようなインタビューすることの形式の社会学的実務と、フェミニストが女性たちにインタビューするときに起こることとの間の「対応(fit)の欠如」について論じている(5)。彼女は、妊娠と出産という女性の経験の研究を行なった自身の経験を記述する。その過程でわかったのは、個人的関わりを避けることは不可能ではないにしても、ばかばかしいということだった。オークレーが話している女性たちはインタビュアーである彼女に質問するし、彼女自身の経験に興味を持った。彼女は、女性たちと全人格的に関わらない理由が見つけられなかった。それゆえ、彼女は女性たちとそのように関わった。女性たちの質問に答え彼女たちの関心に応答し、彼女たちの多くと知り合い、何人かとは長い友人として付き合ったというのである。

しかし問題は、そうしたインタビュー素材を社会学的に分析する段階になった時であるとスミスは指摘する。自分が話してきた女性たちの声や解釈を保存する解釈法を追究するフェミニスト社会学の試みに、この段階で、社会学的言説の構成的慣習のスイッチが作動してしまうと言うのである。ヒラリー・グラハムとの共著「再生産に関する競合するイデオロギー：妊娠についての医療的パースペクティブと母親のパースペクティブ(Competing Ideologies of Reproduction: Medical and Maternal Perspectives on Pregnancy)」(6)においてオークレーは、出産についての二つの異なる対立する「パースペクティブ」を記述する。一つは産科医のパースペクティブであり、もう一つは妊娠中の女性のパースペクティブである。オークレーたちは以下のように書く。「とりわけ、私たちのデータが示唆するのは、母親たちと医者たちは、妊娠が自然な過程か医療的な過程かについて、その結果妊娠は女性たちの生活の諸経験から抽象化され、分離された医療的出来事として扱われるべきかについて、同意していないということだ(Graham&Oakley 1981:52、引用は Smith 1999:64)」。

ここにはまだ人々がいる。しかし今や彼女たちは、社会学的言説の中に位置づけられた対立の例や表現として枠づけられているとスミスは指摘する。「それら[二つの参照枠組み]の違いは、妊娠中の診察と、子供を持つという女性の経験の中に表示される(Graham&Oakley 1981:52、引用は Smith 1999:65)」という文の中で、インタビューや観察で見出されたことがらは、二つの参照枠組みの例証として扱われている。ここには特徴的な、しかし劇的ではない、行為主体(agency)の移行があるとスミスは指摘する。オークレーたちは、「いかにして、医療の枠組みと母親の枠組みの対立はそれ自体顕在化するのか(Graham&Oakley 1981:56、引用は Smith 1999:65)」と問う。産科医たちと患者たちは、互いに議論しているところを目撃されたわけではない。ここで対立は、直接医者と患者の間にあるのではない。対立は「医療的参照枠組みと母親の参照枠組みの間にある」のである。

二つの対立する「パースペクティブ」や「参照枠組み」は、まさに、スミスの言う社会学の言説的構築物である。それらはテクストの中で、もともとは、研究されている人々のあいだの様々な種類の諸活動や出来事から組み立てられている。産科医たちの「パースペクティブ」あるいは「参照枠組み」は、親たちの診察の間に行われた観察に基づいていた。他方で母親たちのそれは、回答者が調査者と直接話すオープン・エンドな形式を広範囲に使ったインタビューに基づいていた。これら二つの非常に異なった情報源が、まず、パースペクティブや参照枠組みとして統合される。さらにそれらが媒介になり、二つの情報源を、この論文のタイトルにもなっている「再生産に関する競合するイデオロギー」へと理論的に跳躍させるのだと、スミスは指摘するのである。

この論文の論点を定義する「イデオロギー」という理論的概念は、「パースペクティブ」や「参照枠組み」という、より下位レベルの一連のカテゴリーやを包摂する。後者の諸概念は、今度は、実際

の観察やトーク―調査者はそこからかれらのデータを生み出したのである―を包摂していく。このようにして、もともとの観察やインタビューの素材は、社会学的言説において取り扱い可能な「対立するイデオロギー」の表現となるのである。もともとの場面から録音された発話は、根底にあるイデオロギー的現実の「現れ(manifestations)」として引用されることになる。institutional な言説は、巡回(circuit)的なやり方で機能する。対象者たちとの話すことや見ることを通した社会学者のもともとの対話から、そのようにして学ばれたことを理論的枠組みに合うように再構成する記述への巡回である(Smith 2014:237-8)。

もともとは研究する人、研究されている人のあいだの様々な種類の諸活動や出来事―診察の時に産科医と女性たち(と調査者)の間で、あるいは、社会学調査のインタビューの際にインタビュアーとインタビュイーの間で、起こったこと、行ったこと、話したこと―だったことがらは、社会学的「テクスト」を産出する過程で、二つの対立する「パースペクティブ」「参照枠組み」「イデオロギー」として記述可能な側面が取捨選択されて再構成される。行為の主体が、この調査研究に参加した具体的な産科医や母親から、これら名詞化された概念に移行されると、今度は、もともとの諸活動や出来事がその概念の表現や現れとして扱われるようになる。これがスミスの言う、社会学的言説の構成的慣習の罠である。人々の声は確かに聞かれたのかもしれないが、それは、結局のところ社会学理論の例証や例や表現としてのみなのである。

スミスの言う「主流の社会学」を行う限りにおいては、この構成的慣習に依拠して「テクスト」を産出することは不可避である。社会学的現実を特定の個人に外在して存在するものとして言説的に構築する方法は、まさに社会学の「構成的」慣習であり、社会学を社会学として成立させる方法なのである。言葉と経験の関係の親密さを欠くような知識の社会的組織化の特徴を、institutions の作動にとって必要不可欠な構成要素と捉え直すことによって、スミスはこの問題を迂回しようとする。

自分の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることが、ひとたび institutional な言葉に置き換えられてしまうと、その言葉が固定する情報はその後で回復できなくなる。institutional な言葉は、行為の実際の諸連鎖の無限な多様性を包摂し要求することができる。不確定なものを確定したものへ変換し、実際の行為の諸連鎖を典型的な institutional な出来事として産出するのである。その際に、実際の行為の諸連鎖の弁別的で局所的で歴史的な特徴は消え、別の解釈図式の選択に関連する情報はもはや利用可能ではなくなるのである(Smith 1990b:155)。「別の社会学」として、スミスは、社会学的言説を含む institutonal な言説が、それに参加する人々の「知ること」を組織化するやり方を解明する道を模索する。それは、自分の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることに依拠して(7)、institutional な言説の名詞化された概念を「荷ほどき」することを試みるという方向である。institutional な言説に習熟した読み手が、institutional な言説の有するある種の「曖昧さ」を埋め首尾一貫したものにする際に、どのような言語使用実践活動を行なっているかを解明することである。

5.「テクスト−読み手の会話」における知識の社会的組織化の探究

以上の議論をふまえ、この節では、institutional な言説を作動させる「テクスト−読み手の会話」をめぐる、スミス自身の経験の分析を取り上げる。『テクストを institutional ethnography に組み入れる』という論文集に収められた論考(Smith 2014：225-251)の中でスミスは、いかにして「テクスト」を読む実践活動の経験的エスノグラフィーが実施されうるのかを考察する(8)。ここで彼女は、あ

る社会学理論の一節を読む自らの実践活動を省察し、いかにして読み手が、その理論テクストの中にあるものを活性化(反応・作動・活動：activate)させるとともに、それに対して応答しなければならないかを示す。そして、いかにしてその理論テクストの言説が、聞かれうること、読まれうることなどを減少させるか―社会の「異種混在(heteroglossia)」を減少させ、管理するか―を呈示していくのである(Smith 2014 :225-226)。

この例証は、ある社会学理論の「テクスト」を読むことが、いかにしてスミスが読んでいた他の複数の「テクスト」の異種混在を管理するのか、それらの声たちを制圧するのか、この社会学理論を他の「テクスト」との会話(あるいは抵抗、対立)へ持っていくのか、についての彼女自身の読みの経験に依拠している。この社会学理論の「テクスト」とスミスの「テクスト－読み手の会話」においては、その「テクスト」に関係する他の「テクスト」からの文章を思い出す実践活動、気づく実践活動、用心する実践活動などが伴っていた。この社会学理論の「テクスト」は彼女の注意や反省や組織化し、他の「テクスト」からの様々な声との「間テクスト的対話」も構造化していったのである。

スミスは、アンソニー・ギデンズによる社会学の論文からの次のような一節を読むという自らの経験を観察し、分析し、報告する。

人間の行為に本来的なことは、いかなる所与の状況においても、行為主体(agent)は、哲学者が時々言うように、別様に行為したかもしれないということだ。特定の事情の重荷がどんなに抑圧的に私たちにのしかかっても、以下のような意味において、私たちは自分自身を自由だと感じる。すなわち、私たちが、自分自身や、自分たちの活動の文脈やそれらの活動のありそうな結果について知っていることに照らして、行為を決定するという意味においてである。この感覚はにせものではない。というのも、行為者はある意味で「別様にすることができたかもしれない」―あるいは後続する一連の行為が何であれ差し控えたかもしれない―ということが、行為体(agency)という概念とって常に真である(analytical)ということは論証可能だからだ(Giddens 1987:3、引用は Smith 2014:239)[(9)]。

ここでの分析の焦点は、彼女の読みの経験を「テクスト－読み手の会話」として、つまり、ある特定の「テクスト」に関わりそれを活性化する特定の時間や場所における読み手のアクティブな関わりとして、探査し解明することである。読み手がこの一節を、社会学的言説に特徴的な読みの方法を展開しながら活性化し作動させる時、「テクスト」は働き始める。この例においては、論文の題名や、この文章の著者である「アンソニー・ギデンズ」というよく知られた社会学的理論家の名前によって、この一節がどのように読まれうるかの指示が読み手に提供されている(Smith 2014:239)。読みの秩序において、一見、彼女には選択肢がないように見える。余白に熱心にメモをとったり、クエスチョンマークの強調点をつけたり、アンダーラインを引いたりすることを通して、読み手は「テクスト」との会話を強行しようとするが、「テクスト」は容赦ないやり方で無反応を実行するように見える。

しかし読むこともまた、会話と同じように、二方向的であるとスミスは指摘する。読み手の意識は、「テクスト」に完全には支配されない。彼女は「テクスト」の読みに、自身の社会学的プロジェクトと関心を持ち込むかもしれないし、記憶や注意という資源を持ち込むかもしれない。「テクスト」と読み手が会話の中にあるとは、「テクスト」を読むことに実際に関わっている時だけとは限らない。この会話は、その後の思考、補足、追加、特定の困難な文章へ戻ること、この「テクスト」と読者が関わっている別の「テクスト」やトークとの対話の接続―あるいはスミスがここで行っているよ

うな分析、としても現れうるのである(Smith 2014:240)。

スミスによれば、社会学的言説に特徴的なことは、読み手と「テクスト」のやりとりが、他の、社会学ではない言語実践活動の領域から隔離されてはいないということだ。オレゴンのアパートでこのギデンズの本を読んでいた時、彼女はいつもより分散的で強いられていない一連の読書を楽しんでいたという。この時スミスは、いかにしてこの社会学理論の文章が、自分が読んでいるあるいは読んでいた他のものとのある種の議論を生じさせるかに気がついた。そして同時に、この文章が、自分の読みを通して、他のものが社会学的言説に入場する許可や、他のものが持つ社会学的言説にとっての含意を規制するやり方にも気がついたのだという。

ギデンズの一節における「私たち」という言葉の使用は、読み手を主体として、一連の行為としての「テクスト」へ参入させる。「私たちは自分自身を自由だと感じる」「私たち」は「私たちが知っていることに照らして行為を決定する」。読んでいる主体として、読み手は「テクスト」のための代理人(proxy)として立つようになる。読み手は「テクスト」の文章と会話する(Smith 2014:241)。そして応答的に、「テクスト」の威厳のある声は「この感覚はにせものではない」と読み手に保証する。読み手の感覚は、理論的に認められるのである。「行為者が別様にすることができたかもしれないことは、行為体という概念にとって常に真である」。「テクスト」に書き込まれた台本によって読み手に与えられた主体の地位は、このようにして適切に権威づけられていくのである。

他方、スミスがこの本を読んでいたのは休暇中のことだったので、彼女には多方面に、厳密な社会学的目的以外のために読む時間があった。「テクスト」による意識のマッピングのもとで彼女は、「テクスト」の局所的代理人としての自分「ドロシー・スミス」と、自分が読んできた他の「テクスト」の間の会話を始めたのだという(Smith 2014:241)。「agent」と「agency」という概念と、一連の行為を選ぶ「自由」という概念が、この「テクスト」の言い方を超えて、それ以前の、進行中の、それ以後の多様な読みからの様々な項目を選択し集めていった(Smith 2014:242)。新聞や本や人々が言うことからの一節が、出現し、見出されていった。例えばスミスはかつて自分が、結婚を選ばない、あるいは一つの結婚の形式をいやいや選択させられた女性としての自分自身の経験を省察する中で、社会学の主体の(agentic)の前提についてのジェシー・バーナードによる批判(10)を使用したことを思い出した。折衷的な読みの過程で、スミスは、社会学理論の「テクスト」の中に適切に権威づけられた「私たち」という主体の地位に、ほころび・裂け目を見出していったのである。

たとえば、「女性とうつの研究」(11)の中で、スミスは、行為主体としての自覚が欠如している女性たちと出会った。その研究の中で、一人の女性は「私が結婚において演じてきた役割は、ほとんど自動操縦装置のようなものだった」と述べていた。別の女性は、「女性とは何かについての私の感覚のほとんどは、直接男性と結び付けられている。女性は自分自身としては何者でもない」と述べていた。あるいはスミスは、精神病院に入院していた女性たちのグループで、ある女性が「自分は、自分自身を女の子として教えられてきた」と述べたことを思い出す。彼女は、自分自身のために全てを決定する力を持っていなかったし、男性のすることや男性の活動や男性のプロジェクトの延長としてその手段としてのみ存在していたと述べた(Smith 2014:242)。スミスは、社会学理論の「テクスト」の代理人としての「ドロシー・スミス」に問いかける。いかにして彼女たちの経験は、人間の行為や行為体についてのこの理論によって主張されうるだろうか、と。

読み手の意識を規制するもの(regulator)としてのギデンズの「テクスト」は、さらなる「例外」の断片を選び出していく。当時定期購読していたイランの労働新聞(ニュースレター)を読んでいた時、スミスはまた別の声を見出した。一つの記事が彼女に言った、イランの労働法の下では「労働者は

下位の人と見なされ、雇い主が社会の所有者とみなされている。」「この法を注意深く読む労働者は全て、彼／彼女自身に言うだろう。この法は、私を、それ自身の舌や意思を持たない生産手段の一部とみなしている、と」(12)。この法は、警察や法廷によって強化されていた。雇い主の意思は、殴打や牢獄や時には死によって支えられるだろう。この労働者たちは、望んでも、決定の自由を持つことができないのである(Smith 2014:243)。

ギデンズの一節は、それに関係する諸断片を思い出す、気づく、探し出すというスミスの読みの実践活動を組織化していった。「テクスト」の代理人として読み手は、「テクスト」の組織化する力を自分自身のものとして引き受ける。もちろん、必ずしも「テクスト」に同意する必要はない。実際、ギデンズの一節は、「自由だとは感じてこなかったであろう人々」の様々な例をスミスに思い起こさせた。しかしスミスは、このこと自体が理論の特別な能力なのだと指摘する。「テクスト」は、読まれ思い出される断片を選び出す。と同時に「テクスト」は、読み手に、それらの断片を社会学的言説に従属させるやり方についての指示をも与えるのである(Smith 2014:244)。

社会学理論に習熟した読み手は、「テクスト」の代理人として、自由ではない、あるいは自由を感じていないと明言している人々の声の例について、この一節との関連性を割り引くやり方を知っている(Smith 2014:243)。「私が挙げた例のどれかで、『行為者はある意味で別様にすることができたかもしれない―あるいは、どんな行為が後続されるのであれそれを差し控えたかもしれない。』と言われえないものはあるだろうか？」と、スミスは問う(Smith 2014:244)。イランの労働者は、別様に行動すること、そして死の危険を選べただろう。その意味で、「特定の事情の重荷がどんなに抑圧的に私たちにのしかかっても、自分自身や、自分の諸活動の文脈や、それらの活動のありそうな結果について知っていることに照らして行為を決定するという意味で、私たちは自分自身を自由だと感じる」と言いうるのであろう。あるいはこの「テクスト」の代理人「スミス」は、「うつ病」と診断された女性たちが「女性とは何か」について感じてきたことを、「彼女たちは『病気』なのだ」として割り引くことになるだろう。

読み手が「テクスト」の代理人として行為することを引き受ける限り、この一節は難攻不落であり続ける。ギデンズは、自由と感じるということが何を意味しうるかを、注意深く定義している。自由と感じる「私たち」が認められる―私たちの感覚は「にせもの」ではない――一方で、自由と感じない人々は「テクスト－読み手の会話」において構成され共有された主観性のサークルの外に落ちて行く。サークルの内部にとっては、「特定の事情の重荷がどんなに抑圧的にかれらにのしかかっても、かれらはどんな行為が後続されるのであれそれを差し控えたかもしれない」ように見えるのだ(Smith 2014:245)。

この理論の定義に対する、社会学的言説の外の他の声からの疑義は、この「テクスト」の他の「代理人」によって、次のように退けられるかもしれない。「でも、彼女[例えば、ドロシー]は、これら[ドロシーによる他の声の収集]があてはまないことを分かっているでしょう？」。他の人は、スミスが論点を解釈し損ねたことを指摘するために、言説の解釈学のより広い範囲に移動するかもしれない。「ギデンズはきっと、啓蒙主義以来の西洋哲学のローカルな道徳言説における伝統的なプロブレマティク、つまり、自由意思対決定論というプロブレマティク、を述べているのだ」「スミスはいずれにしてもこの点を見逃しているのだ」(Smith 2014:245)。

ギデンズの社会理論の一節との会話によって収集された「自由だと感じない人々の物語」は、この「テクスト」と関わることができないし、その「テクスト」が制定する権威を与えられた主観性のサークルには参加できない。社会学的言説の訓練された読者は、自分自身や他の人たちの経験が「テク

スト」の理論的に規制された秩序に挑戦する時には、それを一時差し控えるやり方を知っている(Smith 2014:245)。かれら(スミスをも含む)は、割り込んでくる潜在的に分裂的な他の声たちを制圧するために、「テクスト」によって与えられた指示をどのように取り上げればよいか知っている。理論に規制された「テクスト」の対話的秩序の内部にとどまる限り、別様に感じる可能性、自由ではないかもしれないと感じる可能性、実際のところは自由か自由ではないかという感じ方はしていないかもしれない可能性―すなわち、自他の身に起こっていることを別のやり方で知る可能性―は、閉じられてしまうのである(13)。

6．おわりに

「テクスト－読み手の会話」についての別の論考の中でスミスは、「私たちのテクスト分析は、テクストの中に、私たちが読むやり方を知っていることしか見つけられない。分析は、したがって、メンバーとしての私たちの能力をあてにする。テクストを分析する際に展開される解釈実践は、テクストが意図するものに違いない。ここでの前提は、テクストが解釈の方法や図式を意図するということであり、それらは分析を通して回復されうるということだ(Smith 1990b:121)」と述べている。「テクスト－読み手の会話」を通して、読み手の「知ること」がいかにして社会的に組織化されていくのかを解明することが、ここでの分析の焦点である。

と同時に、スミスは以下のようにも言う。「この企ては、間違っている可能性にかかっている。分析者が能力を欠いているかもしれない可能性、したがって、テクストが分析者の探究に入り込めない可能性にかかっている(Smith 1990b:121)」。institutional な言説に習熟し、これを作動させながら institutions を実際に動かしていく―社会学における知識産出もそのような活動の一つである―ルーティン・ワークの最中に、そもそも自分はこの文章をどのように読んでいるのだろう、そこで何が起こっているのだろう、などという問いは生じにくい。「でも社会構造はどこにあるのだろう？どうやって私はそれを見つけるのだろう？」などという問いは、社会学の博士論文を首尾よく書き上げるするためには、むしろ抑圧されなければならないだろう。

分析者が institutional な言説に習熟している場合、この言説の枠組、概念、カテゴリーの使い方に疑義を挟むことは困難になる。このような場合、特定の視点から自分の身体的存在や身体的行為において生じたものとして知っていることとしての実際に起こっている多種多様なことがらは、特定の視点を欠いた名詞化された言葉によって、問題なく適切に記述されているように見えるのである。スミスはこのことを「institutional な言説に捕らえられること(institutional capture)」と呼ぶ(Smith 2005:155-157, 上谷 2019)。スミスの言う知識の社会的組織化の解明は、いかにしてこの「institutional な言説に捕らえられること」を回避できるかにかかっているのである。

institutional な言説の有するある種の「曖昧さ」は、どのような言語使用実践活動を通して埋められていくのか。このことを明らかにするには、institutional な言説の名詞化された概念を荷ほどきする必要がある。それは、institutional な言説に依拠した社会学的探究とは異なったやり方で進むこと、確立されたやり方を逆さまにすること(Smith 1999:45)を意味する。そのためには、ものを考えるための抽象的な言葉に含まれたものの見方を、自らの日々の生活で見たり聞いたり経験する現実を語る日常の言葉に基づいて改めて吟味し、点検し、再考してみる、という思考法が必要となると考えるのである。

【注】

(1) 『翻訳語成立事情』(柳父 1982) で取り上げられるのは、「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」「自然」「権利」「自由」「彼、彼女」という言葉である。これらの言葉のうち、「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」は、幕末から明治時代にかけて、翻訳のために造られた新造語、あるいは実質的に新造語に等しい言葉であるという。「自然」「権(利)」「自由」「彼、彼女」は、日本語としての歴史を持ち、明治以前の日常語の中にも生きてきた言葉で、同時に翻訳語として新しい意味を与えられた言葉であるという。柳父の議論については、上谷(2020b) も参照。

(2) ここでワーク(work)とは、単に賃金労働のみならず、何らかの努力を必要とし、人々がそれをやることに意味を付与し、何らかの獲得された能力を含むような、人々が行うことすべてに拡張されている。institutional な過程が作動するために必要不可欠であるにも関わらず、公的な文書としての「テクスト」においては、起こったこととして観察可能・報告可能にならない様々なことがらである。スミスの「ワーク」概念については、上谷(2019) も参照。

(3) 私たちの日常生活の状況には、テクストがいろいろなやり方で作用しているとスミスは指摘する。私たちは常に、何らかのやり方で有効な、行為のテクスト的に媒介された形式に関わっている。例えば、会議に登録するために申し込み用紙を記入する。ホテルの価格や備品についての情報を与えるパンフレットを受け取る。小切手を切り、運転免許証を見せる。クレジット・カードを使う。日々新聞を読む。さらにテクストという考え方を拡張するならば、テレビあるいはコンピュータ・モニタを見る。控除が列挙された所得報告書を受け取る。大学で、旅費の交付のための申請書が作成される時にはカリキュラムの履歴を用意し、適切な用紙に書き込む。授業の説明を書き、文献リストを用意する、などである。テクスト的出来事は広く普及しているが、にもかかわらずほとんど全く気づかれていない、とスミスは指摘する。対面的コミュニケーションが社会学的諸現象の典型となってきた。そしてその魅力的な曖昧さ(equivocality)のために、ありふれたそしてしばしば退屈で不可解なテクスト的コミュニケーションやテクスト的に媒介された行為の世界から人々の注目を奪ってきた、と言うのである(Smith 1990b:122)。

(4) スミスがここで紹介しているのは、Giltrow による経営の言説の分析(Giltrow, J. (1998) Modernizing Authority, Management Studies, and the Grammaticalization of Controlling Interests. *Technical Writing and Communication* 28(4):337-58.) である。

(5) Ann Oakley(1981) Interviewing Women : A Contradiction in Terms. in Helen Roberts(ed.) *Doing Feminist Research*. Routledge and Kegan Paul.

(6) Hilary Graham & Ann Oakley(1981) Competing Ideologies of Reproduction : Medical and Maternal Perspectives on Pregnancy. In H.Roberts(ed.) *Women, Health and Reproduction*. Routledge and Kegan Paul.

(7) 別の言葉では「ワーク・ノレッジ」に依拠してと、言い換えることもできる。上谷(2019) も参照。

(8) この論文は、Exploring the Social Relations of Discourse : Sociological Theory and the Dialogic of Sociology(Smith 1999:132-156) に加筆修正したものである。

(9) Anthony Giddens(1987) *Social Theory and Modern Sociology*. Stanford University Press.

(10) Jessie Bernard(1973) My Four Revolutions : An Autobiographical History of the A.S.A. in Joan Huber(ed.) *Changing Women in a Changing Society*.University Chicago Press.

(11) Dana Crowley Jack(1991) *Silencing the Self : Women and Depression*. Cambridge.

(12) Mostafa Saber & Mansour Hekmat (1992) Labour Law Against Worker's Rights : A Critique of Labour Law. *Labour Solidarity*, Jan./Feb.

(13) あるいはここで、柳父に依拠して、free と自由を互換可能なものとして扱って良いのか、ととうこともできるだろう。「自由」は明治以降、freedom や liberty の翻訳語として使用されるようになったが、同時に、それ以前にも日本語としての歴史を持ち日常語の中にも生きてきた言葉であったという(柳父 1982:173-191)。それゆえ日本語「自由」には、漢籍由来の伝来の意味「わがまま勝手」という意味と、freedom や liberty の翻訳語としての意味が共存している。しかも、日本語の日常に浸透している「わがまま勝手(自由)」は否定的な価値を持っているが意味内容は具体的、一方で「自由権」という文脈で使われるような「freedom、liberty(自由)」は肯定的な価値を持っているが意味内容は抽象的、という特徴を持つ。この矛盾した意味の共存について、「荷ほどき(unpacking)」してみる必要もあるだろう。

【文献】

Dorothy E. Smith(1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. University of Toronto Press.

— — —(1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*, Northeastern University Press.

— — —(1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling,* Routledge.

— — —(1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. University of Toronto Press.

— — —(2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Altamira Press .

— — —(2014) Discourse as Social Relations : Sociological Theory and the Dialogic of Sociology. in Dorothy E. Smith & Susan M.Turner(eds.)(2014) *Incorporating Texts into Institutional Ethnographies*, pp.225-251. University of Toronto Press.

Dorothy E. Smith & Susan M.Turner(eds.)(2014) *Incorporating Texts into Institutional Ethnographies*, University of Toronto Press.

上谷香陽(2010a)「ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題—— institutional ethnography という視点」『ソシオロジスト』12(1)pp.73-96. 武蔵社会学会。

— — —(2010b)「対話としての『経験』——ドロシー・スミスの視点」『武蔵大学総合研究所紀要』no.19、pp.117-133. 武蔵大学総合研究所。

— — —(2017a)「日常生活世界から社会を知る方法——ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点——」『文教大学国際学部紀要』27(2)、pp.1-16. 文教学部国際学部。

— — —(2017b)「日常生活世界の記述可能性——ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点——」『文教大学国際学部紀要』28(1)、pp.1-22. 文教学部国際学部。

— — —(2018a)「テクストに媒介された言説とイデオロギー・コード——ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって」『文教大学国際学部紀要』28(2)、pp.1-20. 文教大学国際学部。

— — —(2018b)「社会を知るもう一つのやり方——ドロシ・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』29(1)pp.1-18. 文教大学国際学部。

— — —(2019)「ドロシー・スミス Institutional Ethnography におけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)、pp.1-16. 文教学部国際学部。

— — —(2020a)「研究ノート：経験を語る二つの様式の断絶—知識の社会的組織化をめぐるドロリー・スミスの着眼点—」『文教大学国際学部紀要』30(2)、pp.55-68. 文教学部国際学部。

— — —(2020b)「研究ノート：「社会」という言葉を使って Society について考えるということ—柳父章の翻訳日本語論を手がかりに—」『湘南フォーラム』24、pp.109-122. 文教大学湘南総合研究所。